

第1章 左義長（どんど焼き）の起源

先に紹介したホームページ（<http://3rd.geocities.jp/localbrandkenkyu/lbk002/dondo.html>）では、左義長（どんど焼き）について、次のように説明している。すなわち

『 「どんど焼き」とは小正月（こしょうがつ＝1月15日）の行事で、正月の松飾り・注連縄（しめなわ）・書き初めなどを家々から持ち寄り、一箇所に積み上げて燃やすという、日本全国に伝わるお正月の火祭り行事です。

左義長（三毬杖）は、正月十五日、平安時代の宮中で、清涼殿の東庭で青竹を束ねて立て、毬杖（ぎっちょう）三本を結び、その上に扇子や短冊などを添え、陰陽師（おんみょうじ）が謡いはやしながらこれを焼いたという行事です。それが民間に伝わりどんど焼きとなったといわれています。

火は穢れを浄め、新しい命を生み出します。竹の爆ぜる音は災いを退け、高く上る煙に乗って正月の神様が帰ります。どんど焼きは、祓い清めという役割と、正月に浮かれた人々を現実世界に戻す、二つの役割を担った行事とおもわれます。

この火にあたると若返るとか、焼いた団子を食べると病気をしない・虫歯にならないとかいわれています。

また、燃やした書初（かきぞめ）の紙が高く舞い上がると習字が上手になり勉強もできるようになるなどともいわれています。

お守り、いただいたお神札（おふだ）に感謝して、古神札の焼納やだるまなども燃やします。

その他にも、1年中の身体健康・無病息災・家内安全・五穀豊穰などを祈願しているそうです。

「正月飾り」を燃やすという行為から、神様を空に送る、つまり「正月の神様」が空に帰っていくという意識が共通して働いているものとみられます。』・・・と。

平安時代には毬杖（ぎっちょう）というホッケーのような子供の遊びがあったらしく、ボールを打つスティックも毬杖（ぎっちょう）と呼んだ。それを三本、青竹の束（円錐型に立てたもの）に三方向から括り付け、その上に扇子や短冊などを添えたものを「三毬杖

(さんぎっちょう)」と呼んだらしい。そして、陰陽師(おんみょうじ)が謡いはやしながらそれを焼いた儀式も「三毬杖(さんぎっちょう)」と呼んだのである。それが後年、民間に伝わって「どんど焼き」になったのだが、それが何故左義長(さぎちょう)と呼ばれるようになったのかは判らない。問題は、青竹の束(円錐型に立てたもの)を何故燃やすのかということである。

その理由を説明して、「三毬杖(さんぎっちょう)」の起源に関する私の説明としたい。

爆竹は中国での魔除けに由来する。漢代の『神異経』・『西荒経』によれば、西方の山奥に人間の姿をした一本足の怪物・山魃(さんしょう)が棲んでおり、山魃に出会った人間は高熱を発し苦しみながら死んで行くと言われていた。伝承では春節の際に山魃は山から人里に下りてくるため、人々は春節を非常に恐れていたとされる。

ある日とある農民が山で竹を伐採し家に帰ろうとした際、肌寒く感じた農民は竹に火を付けて暖を取っていた時に山魃と遭遇した。驚いた農民は火の付いた竹を捨てて逃げ出したが、山魃も火のついた竹がパチパチと音を立てていることに驚き山に逃げ戻った。山魃の弱点を知った人々は毎年正月になると各家庭で竹を燃やし、それに恐れをなした山魃は再び人里に現れ人々を苦しめることは無くなったとされる。

南北朝時代では竹を燃やす原始的な爆竹が一般的となっており、『荆楚歳時記』では上記の故事が紹介されている。

では、次の第2章では、玉垂宮の鬼夜について、その謂れや全国的な広がりなどを探っていきたいと思う。